―短　歌―

柴　舟

◉春のはじめ

日の光ぬくきがいとど嬉しくて殘る雪ふむ草の芽をふむ

うれしくも春こそ來つれ道の土いと滑らかになりもゆくかな

おとなしう坐りてまたも考ふる少年の日におもひつること

ほの黑う塵にまみれて殘る雪殘らではあらぬ事の悲しや

そは何のためぞと問はじ默すべき事してありきあはれ朝より

心より今まだ人をにくみえず事としあればほほゑみて見す

堪へがたくわれの歎くを誰れにしも見せぬは何か物ぞ足らはぬ

いくばくも生くといふにはあらじかし心のままの一日もがな

何をみむためといふにはあらねども高き窓をばあけ放ちぬる

この心似るものぞなき大空の雲といふとも形ありけり

新　芽

賛助員　ひで

黑き土かへして出づる芍藥の赤き新芽のなつかしきかな

芍藥の赤き新芽の事なげにすら〳〵のぶるうらやましさよ

芍藥の赤き新芽をぬらしては土にしみ入る春の雨かな

月の夜はかの學び舍のなつかしく歌うたひつゝ校庭をさまよふ

月の夜は悲しなつかしいく千度變らぬ影と思ひながらも

月清く靜かなる夜や幾人か吾に同じき思なるべき

この朝げすら〳〵かきしぼおるどのちようくのあともまづ心地よし

春の雪かゝるかまゝにまかせつゝよき衣濡らす心おごりよ

春の雪心地よしなと云ひながら逆上せし顏をさらしてぞゆく

別れきて心落ち居ぬ汽車の中音なく春の雪は窓打つ

日毎〳〵八時となれば吾くゞる門の柳よまたもえいでぬ

生きてありやなどゝ傷つけためし見し柳はもえて三度春來ぬ

何時しかに草もえ出でぬ鳥なきぬこの天地よなほ生きてあり

吉備の國野邊は青みぬおほどかに我心なほ冬こもりせり

春は來ぬ有るかなきかのわが生よこの天地によみがへり來ぬ
なまぬるき風の吹く日よ中國の山もかすみてたゞになつかし
轟々と上り列車の來る毎に乘りて行きたやかの東京に
木蓮のつぼみはやゝにふくらみぬやがて咲く日は子等のいづる日
業成りて子等は出で行くこの三年はづかしや吾何をしへけむ
あやまちの一つ消えてはまた一つふえては消えて消えてはふゆる
南の果に敎の鞭とりしこの二年にやつれたる君
父の如く母の如くに頼みます君のはらからさぞな歎かむ
幸うすくやつれし身をばなよ〳〵と窓になげかく君に涙す
今にして思へば遠き五百里の末には君をやるまじものを

四首宮川君御病得て琉球よりかへりたまふを迎へて

◉かたをなみ

贊助員　山下さい

鳴りいでし時計のおとを數へつゝつかむことはをふとわすれけり
おとなしくまかるゝまゝにチクタクと時計はありぬ文机のうへ

夕されば山なす白きネル積みてちまたの霧に消えゆくゝまる
こぼれたるミルクのゆくへみてあればま黑き土に泌みいるなりけり
しつとりと黑みわたれる土の上寸ばかりぬく水仙のあを
軒近き密柑の枝のをちかたに朝はかすめるかつらぎの山
足もとにこぶるが如くよせ〳〵ぬ和歌の浦へのそのかたをなみ
ましろなる練りぎぬしぼるさまにして山かげに入る雲のいくすぢ
つやゝかにねりぎぬのごとひかりたり春の日あびてたゞよへる雲